

## 富山市科学博物館研究報告

第33号 (2010)

## 原 著

## 生物系

- 坂井奈緒子：長野県白馬村親海湿原、姫川源流の水生蘚苔類
- 佐藤 卓・太田道人：富山県に産する日本海要素とその近縁植物の分布の特徴(2) —特に北方系日本海要素について—
- 布村 昇：富山平野で発見されたサトワラジムシの1種
- 布村 昇：富山県東部のアズマモグラの巣材から発見された陸産等脚目甲殻類1の新種
- 布村 昇：京都大学芦生演習林から発見されたワラジムシの1新種
- 布村 昇：滋賀県の陸産等脚目甲殻類
- 布村 昇：北海道知床から発見されたシリケンウミセミ属（等脚目:コツブムシ科）の1新種
- 山内健生・布村 昇：加野泰男博士採集の富山湾産ウオノエ科魚類寄生虫（甲殻綱：等脚目）
- 奥野淳兒・布村 昇：富山市科学博物館所蔵の富山湾ならびに富山県内陸水産コエビ類（甲殻上綱：十脚目）
- 齋藤 寛・布村 昇：富山市科学博物館所蔵多板類(軟体動物門)

## 短報

- 坂井奈緒子：富山市科学博物館2階展示室のスギ株に着生もしくは根元に生育していた蘚苔類
- 坂井奈緒子富山県内のカワゴケの分布に追加する2産地とその現状
- 根来 尚：富山県初記録のイマニシガガンボダマン
- 金野 晋・根来 尚：クモガタガガンボ類の富山県における追加記録
- 南部久男・真柄真美・栗原望・山田格・関東雄・台藏正一・石川雄士：富山湾における鯨類の記録（2009年）
- 真柄真美・栗原望・山田格・南部久男・石川雄士：富山県氷見市に漂着したハンドウイルカ(*Tursiops truncatus*)
- 朴木英治・渡辺幸一：立山における酸性雨観測結果(2008)

## 資料

- 根来 尚：アカトンボ（アキアカネ）アンケート結果
- 根来 尚・二橋弘之・北村征三郎・野村孝昭：富山県・石川県内数カ所でのアカトンボセンサス結果（2008年）
- 二橋 亮・二橋弘之・新堀修：富山県のトンボ（2009年度記録）
- 南部久男：富山市におけるツキノワクマの出没記録（2009年）
- 南部久男：東北地方における明治期の哺乳類の統計
- 桃花鳥の会：富山市城南公園の野鳥（2007年6月～2008年5月）

## 原著

### 富山県立山町虫谷岩室の滝周辺に生育する蘚苔類

坂井奈緒子

蘚類 57 種類、苔類 23 種類を報告した。その中に、環境省の絶滅危惧Ⅱ類に指定されるジョウレンホウオウゴケが含まれていた。本調査地に近い上市町大岩千巖溪の蘚苔類相に比べ蘚類の種類数が多かったが、開けた明るい場所があることによると考えられる。

### 富山県内におけるクロカワゴケの分布

坂井奈緒子

文献探索、標本調査および追跡野外調査の結果、富山県内のクロカワゴケの報告は 10 産地以上あったが、2009 年に生育が確認されたのは 2 産地であった。減った要因は、河川改修による消失や誤同定の疑いのある産地などによる。クロカワゴケは全国的には山地の清流に生育し、環境省の絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。県内の生育が確認された 2 産地は、黒部川扇端部の湧水の流れて、低海拔地での生育は稀少と考えられる。

### 富山県に産する日本海要素とその近縁植物の分布の特徴(2)

—特に北方系日本海要素について—

佐藤 卓・太田道人

富山県内に産する日本海要素と呼ばれる植物の分布がどのような環境因子と関連があるのかを、蓄積された分布情報とメッシュ気候値を使って考察した。今回は、北方系の日本海要素の植物 19 種を取り上げた。

結果

- ・北方系日本海要素の分布に影響をおよぼしている環境因子は標高と年降水量、最深積雪、CI の 4 因子であると考えられた。
- ・ヤナギランは北方系日本海要素とされるが、日本海指数が小さい地域で年平均降水量も少ない内陸的気候の地域に分布していることがわかった。
- ・ハクサンコザクラとハクサンオオバコは最深積雪と年平均降水量が他の分類群より大きく、日本海指数が大きい地域に分布していることがわかった。
- ・日本海側気候の地域に分布していると判断（日本海指数が 90 以上）された分類群は、オオコメツツジとオオバキスミレ、ノウゴウイチゴ、ヒオウギアヤメ、タテヤマスゲ、ミヤマホタルイ、ハクサンコザクラ、ハクサンオオバコの 8 分類群であった。

## 富山平野で発見されたサトワラジムシの1種

布村 昇

立山町泉の栃津川畔の土手から採取されたトウヨウワラジムシ科等脚目を新種、<sup>モンゴロニスクス</sup> *Mongoloniscus* <sup>アルウス</sup> *arvus* (和名：ニイカワサトワラジムシ、新称)として記載した。本種は富山平野の水田地帯を流れる栃津川の土手の草むらや比較的大きな石の下から採集されたものである。本種は日本中央部の二次林や林縁、農耕地などに普通に見られるフイリワラジムシ *M. maculatus* と最も類似するが、(1) オスの第1腹肢内肢がまっすぐであること、(2) オス第1-3胸肢の長節側面に弓形の一系列の小剛毛があること、(3) 胸部の剛毛が側縁から離れているものがあること (4) オスの第2腹肢内肢が長いこと (5) 胸脚に剛毛が多いこと (6) 第3腹肢が短いこと(などで区別できる。本種の基準標本は富山市科学博物館に保管される。

## 富山県東部のアズマモグラの巣材から発見された陸産等脚目甲殻類1の新種

布村 昇

富山県東部魚津市ミラージュランドのアズマモグラの巣材から採取されたワラジムシを新種 <sup>ルカシオイデス</sup> *Lucasioides* <sup>ヨコハタ</sup> *yokohatai* (和名：ヨコハタモグラワラジムシ：新称)として記載した。本種は富山県西部のモグラの巣から記録されている <sup>ルカシオイデス</sup> *Lucasioides* <sup>トヤマ</sup> *toyamaensis* と類似するが、(1) 第1腹肢外肢の先端付近に剛毛があること、(2) 頭部前面観で上方が低い三角形であること、(3) 第3胸節の剛毛も側縁から遠くにあること、(4) 第6胸肢座節に多数の長い剛毛があること、(5) 雄の第2腹肢外肢の内縁に剛毛が無く、外縁に剛毛があることなどによって区別される。

本種の基準標本は富山市科学博物館に保管される。

## 京都大学芦生研究林から発見されたワラジムシの1新種

布村 昇

京都府南丹市の京都大学附属芦生研究林内から渡辺弘之博士により採集されたワラジムシの1種を新種 <sup>ルカシオイデス</sup> *Lucasioides* <sup>アシウ</sup> *ashiensis* (和名：アシウハヤシワラジムシ：新称)として記載した。本種は宮崎県から知られているニチナンハヤシワラジムシ <sup>ニチナン</sup> *L. nichinanensis* と最も類似するが、(1) はっきりした背面の模様があること(2)第2触角の第2節が第1節より明らかに長いこと、(3)胸肢に多数の2叉剛毛が見られること(4)第1触角の剛毛数が多いこと、(5)第1~4胸節の剛毛が側縁から離れた位置にあること、(6) 第1および、第2胸節の長節や腕節の剛毛は比較的密生しないことなどで区別される。本種の基準標本は富山市科学博物館で保管される。

## 滋賀県の陸生甲殻類

布村 昇

2009年に滋賀県各地を調査するとともに滋賀県産の富山市科学博物館所蔵標本を調査した。調査の結果滋賀県の中から11種の等脚類、1種の端脚類、1種のカニ類を確認した。そのうち、等脚類の2種を新種として記載した。

1種目は <sup>モンゴロニスクス</sup> *Mongoloniscus* <sup>オウミ</sup> *oumiensis* [和名：オウミサトワラジムシ]として記載したもので、南九州から知られている *satsumaensis* と類似するが(1)第2-4胸部体節の剛毛が体縁からより遠い位置にあること(2)第1小顎外葉のすべての歯に切れ込みが無いこと(3)雄第2腹肢内肢が短いこと、(4)生殖突起先端が尖っていることより区別される。2種目は <sup>アグナラ</sup> *Agnara* <sup>ヒコ</sup> *biwakoensis* [和名：ココクヒナワラジムシ]として記載されたもので、石川県羽咋市から記録されている <sup>アグナラ</sup> *Agnara* <sup>ハニ</sup> *pannosus* と類似するが(1) 雄第1腹肢外肢外縁に凹凸が無いこと、(2) 第1触角の感覚剛毛数が多いこと、(3)第1小顎外葉に鋸歯があること、(4) 第1小顎内葉に小さな突起があること、(5) 雄第2腹肢外肢外縁のとげの数が多いことで区別される。2新種の基準標本は富山市科学博物館におかれる。

## 北海道知床から発見されたシリケンウミセミ属(等脚目:コツブムシ科)の1新種

布村 昇

北海道知床半島で行われた「環境省による知床半島沿岸域における浅海生物相調査」で五嶋聖二氏らが採取した等脚類の標本を調査した中でコツブムシ科の1種が未記載種であることが判明し、新種<sup>ダイノイデス ビコロール</sup>*Dynoides bicolor*〔和名：ソメワケウミセミ、新称〕として記載した。本種はシリケンウミセミと類似するが、(1)体の前半が黒く、後半が白いこと、(2)胸部後縁中央部にある突起が短いこと、(3)腹尾節後端の湾入が浅いこと、(4)触角が短く、それを構成する鞭数も少ないこと、(5)目が小さいこと、(6)第2小顎内肢に鋸状の歯があること、(7)第1胸脚が太く短いこと、(8)第1小顎内の剛毛数が少ないことなどで区別される。本種の基準標本は富山市科学博物館に保管される(TOYA Cr-19971)。

## 加野泰男博士採集の富山湾産ウオノエ科魚類寄生虫（甲殻綱：等脚目）

山内健生・布村 昇

加野泰男氏が1974–2000年に富山湾で採集したウオノエ科魚類寄生虫標本45個体を調査し、以下の5属4種3未同定種を確認した：ウオノコバン属（新称）の未同定種（宿主：マハゼ）、ウオノギンカ属（新称）の未同定種（宿主：コノシロ）、ソコウオノエ（宿主：アカムツ）、タイノエ（宿主：マダイ）、モトキア・パルボチス（宿主：サヨリ）、エラヌシ属の未同定種（宿主：メジナ、チャガラ）、エツサ・レイナウディ。タイノエの学名は新結合である。コノシロ（ニシン科）はウオノギンカ属の、そしてチャガラ（ハゼ科）はエラヌシ属の新宿主記録となる。

## 富山市科学博物館所蔵の富山湾ならびに富山県内陸水産コエビ類（甲殻亜門：十脚目）

奥野淳兒・布村 昇

富山市科学博物館に所蔵されている富山湾産コエビ類標本を調査し、8科21属37種を確認した。このうち、テナガエビ科のユビナガスジエビ、モエビ科のキタツノモエビ、アシナガモエビモドキ、ナガレモエビ、ロウソクエビ科のモバロウソクエビ、およびエビジャコ科のカシオペエビジャコは富山湾からの新記録であった。また、本コレクションには富山県の陸水域から採集された2科4属4種が含まれていることが確認された。

## 富山市科学博物館所蔵多板類（軟体動物門）

齋藤 寛・布村 昇

富山市科学博物館で所蔵のヒザラガイ類を齋藤が再同定し全標本670個体の目録を作成した。特に北陸地方の多板類類についての詳細な研究はなく、分布研究の上で全て証拠標本として保管されており、比較的詳しい標本情報を挙げることで各種の分布を確認できるようにした。

短 報

富山市科学博物館展示室のスギ株（立山下ノ子平産）の蘚苔類

坂井奈緒子

蘚類6種類、苔類9種類を報告した。山地帯での採取であったが、本来は亜高山帯に生育する5種類が含まれていた。蘚苔類の多くは、着生基物によって生育する種類が異なる。亜高山帯ではオオシラビソなどの針葉樹林が広がるが、本報告の蘚苔類の着生基物が針葉樹のスギであったために、亜高山帯の種類が生育していたと考えられる。

## 富山県内のカワゴケの分布に追加する2産地とその現状

坂井奈緒子

カワゴケの富山県内の分布は、1964年に採取された標本と1938年に発表された文献をもとに2産地が追加され、4産地となった。しかし、2005年と2009年に行った追跡調査では、追加された2産地での生育は確認されなかった。

## 富山県初記録のイマニシガガンボダマシ

根来 尚

富山県初記録となる、イマニシガガンボダマシを、立山町七姫平(2004年1月18日)、南砺市梨谷(2009年1月8日)、南砺市楮(2008年1月5日)で採集し報告した。併せて、長野県駒ヶ根市で採集(2004年2月10日)した個体も報告した。本種は、本州中部以北青森県までの山地に広く分布する様である。

## クモガタガガンボ類の富山県における追加記録

金野 晋・根来 尚

富山県初記録となる、カネノクモガタガガンボを、立山町七姫平～桂台(2005年1月28日)、同桂台～称名滝(2004年1月4日)で採集し報告した。併せて、石川県鳥越町で採集(2003年2月24日)した個体も報告した。富山県からは、クモガタガガンボ類としては本種の他にニッポンクモガタガガンボの記録がある。

## 富山湾における鯨類の記録(2009年)

南部久男・真柄真美・栗原望・山田格・関東雄・台藏正一・石川雄士

2009年に3科4種8例8個体の鯨類(漂着7例7個体で、目撃が1例1個体)を富山湾で確認した。いずれも富山湾では既知種である。カマイルカは、1月23日～6月4日にかけて、最も多い4例4個体が確認された。他にハンドウイルカ1例1個体、イシイルカ1例1個体、ミンククジラ2例2個体を確認した。

## 富山県氷見市に漂着したハンドウイルカ(*Tursiops truncatus*)

真柄真美・栗原望・山田格・南部久男・石川雄士

2009年3月に富山県氷見市で、ハンドウイルカ (*Tursiops truncatus*) 1頭が漂着した。本個体は、比較的死後経過時間が短い個体であり、現地で計測および剖検を実施した。肉眼解剖結果から、性的に未成熟である若い雌の個体であると判断され、気管における白色泡沫状物充満および肺のうっ血水腫、豊富な胃内容物、胃腸内における寄生虫寄生を確認した。座礁および死因を特定する所見は確認できなかったが、食性などのデータを蓄積することができ、日本海側でみられるハンドウイルカの生態を知る有用な手がかりが得られた。

## 立山における酸性雨観測結果(2008)

朴木英治・渡辺幸一

2008年に立山で行った標高別の酸性雨観測結果の概要と観測データを報告した。立山の降水の月平均の酸性度はpH4.7～5.4で、富山市市街地と比べて酸性度が強くなる月と弱くなる月とがあった。降水中の酸性物質のうち、硝酸イオン濃度は標高が高くなるにつれて濃度が大きく低下したのに対し、非海塩性硫酸イオンの方は標高の増加に対する濃度の低下率が低く、両者の標高に対する変化様式は従来の結果と同様であった。

### 資料

## アカトンボ (アキアカネ) アンケート結果

根来 尚

富山県内在住の自然に関心のある224名に、アカトンボ (アキアカネ) についてアンケートを行なった。その結果、アカトンボが最近 (5～10年以上前) 減少していると感じている方がたいへん多く (80%以上)、また、平地でも山地でもアカトンボの群飛を見なくなったからそのように感じると答えた方 (約80%) が多かった。地域によらず、一般市民においても、トンボ研究者と同様にアカトンボの減少に気づいていることが解った。

## 富山県・石川県内数カ所でのアカトンボセンサス結果 (2008年)

根来 尚・二橋弘之・北村征三郎・野村孝昭

最近、減少が著しいと思われるアキアカネを中心にアカネ属について、2008年に富山県 (12カ所)・石川県 (3カ所) の15カ所で個体数調査を行なった。本調査以前の比較可能な資料は存在しないので明確にはいえないが、平野部では、明らかにアキアカネ・ノシメトンボの個体数は少ないものであった。

## 富山県のトンボ (2009年度記録)

二橋 亮・二橋弘之・新堀修

富山県のトンボ類を継続的に調査しており、2008年までの記録を報告している (二橋ほか, 2004, 2008; 二橋・二橋, 2005,

2006, 2007, 2009a)。今回の報告では、2009年（調査日数：二橋 235 日、新堀 105 日）に得られた知見を、採集・撮影記録とあわせて報告した。2009年には、ヒメサナエが県内で初めて記録され（二橋・二橋, 2009 b）、これにより県内の記録種数は 88 種になった。2009年の調査では、近年県内で記録のないホンサナエ、オナガサナエ、遠方からの飛来種であるオオギンヤンマ、スナアカネ、イソアカネ、ハネビロトンボ、アメイロトンボ、生息地を未調査であるムツアカネおよび県内での産地が限られるアオサナエ、ムスジイトトンボ、ネアカヨシヤンマ、タイリクアカネの 12 種を除いた 76 種が確認された。

## 富山市におけるツキノワグマの出没記録（2009年）

南部久男

2009年の富山市のツキノワグマの出没状況を調査した。2009年は、富山市全体で22メッシュ（1メッシュは約1km×1km）、25件の出没があった。地域別別では、2～4件が八尾と婦中地域、6～7件が、大沢野、大山、山田地域で、細入と富山地域は出没情報が得られなかった。2005～2008年の出没状況と比較すると、2009年の春～夏は、最も出没が少なかった2005年に次いで少なく、秋も出没が最も少なく、ブナの豊作年であった2005年に次いで少なかった。

## 東北地方における明治期の哺乳類の統計

南部久男

東北地方の明治・大正時代の府県統計書、勸業年報、府県史料等の哺乳類の毛皮の統計等を調査した。カワウソは明治期の毛皮等の統計等より、福島県では、カワウソは明治期後半から大正末から昭和初期にかけ、生息数が減少したと思われる。ニホンジカは、青森県、秋田県、山形県では、明治期には生息したが、以降もほとんど生息していなかったと思われる。一方、岩手県や宮城県では、明治期には生息し、大正末からは少数が生息し、岩手県では昭和 50 年代頃から、宮城県では、平成 10 年代から生息数が増加していると思われる。イノシシは青森県や岩手県では明治期には生息し、以降近年までほとんど生息していない。宮城県、福島県では、明治期には生息し大正末から少数が生息し、岩手県では昭和の後半から、宮城県では平成の後半から増加していると思われる。

## 富山市城南公園の野鳥（2008年6月～2009年5月）

と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>  
桃花鳥の会

2008年6月～2009年5月にかけ、富山市の城南公園で月1回早朝野鳥調査を行った。城南公園内では、25種の鳥類（留鳥 17 種、夏鳥 2 種、冬鳥 5 種、不明 1 種）が確認された。10 回以上確認できたのは、キジバト、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの 6 種、6～9 回確認できたのは、ハクセキレイ、シジュウカラ、カワラヒワ、オナガの 4 種、2～5 回確認できたのは、カルガモ、キジ、セグロセキレイ、ツグミ、ウグイス、イカルであった。今回新たに確認できたのは、イカル（留鳥）、マヒワとジョウビタキ（いずれも冬鳥）であった。